

東日本大震災救護班に参加して～in 宮城県亶理町

地域医療連携部(看護師)

田中 美千子

「震災で犠牲となった方々の、ご冥福をお祈りして…黙祷」

午後2時46分、さっきまでざわめいていた避難所が一斉に静まり、皆一様に入り口の明るい方に向かって祈りを捧げている。明るい方…そうか、こっちは海の方角か。

震災からちょうど2ヶ月。先に被災地に派遣された看護師から状況を聞き、着いた亶理町の公民館。高速で福島県内に入ったあたりから見た景色には、青いビニールシートをかぶった屋根が多くなり、一般道へ入ってからの状況に不安を感じていた。しかし、公民館周囲はほとんど瓦礫もなく、スーパーや飲食店が営業を行っている。ずいぶん復旧しているなあ…と感じながら、前任の済生会病院の職員の方から引継ぎを受けた。先に派遣された看護師からの情報とは大いに改善され、私たちが利用させていただいた公民館ではライフラインも復旧。通常と違うとすれば、トイレに「使用したペーパー等は流さないで、ゴミ袋に入れて下さい。」と張り紙があり、下水処理が不十分なことが伝えられているくらい。



避難所の様子



自衛隊のお風呂
開設して1ヶ月あまりで
2万人の利用があった。

翌日、派遣医療も終盤、岐阜県は今週で打ち切りと決まった状況で訪れた避難所。校庭は駐車場になり、体育館の前には炊事をするためのプレハブ小屋があり、煮炊きする匂いが漂っている。医薬品などの資材を抱え、避難している方々に挨拶をしながら入った体育館には、テレビで見る避難所の光景が薄暗い中に広がる。町中の光景とはあまりにも違い、隔離された別世界のように感じられた。

日中は多くが仕事や片付けに行き、避難所に残っているほとんどが高齢者。その中でも若い人は一日中炊事をしている。不自由な設備で数百人の食事を作るのは大変な作業である。

診療に来られた方々の病状も急を要するものはほとんどなく、問診時や待ち時間に交わした会話はやはり震災の事。特産のイチゴの収穫中、イチゴがもったいないからと自宅の保冷庫に戻った家族が帰らない高齢者…かける言葉もなく、目が潤んでしまう。

避難所の足元も不安定な生活、固い床、立ち仕事が続く炊事係りなど、足腰の痛みを感じている人も多く、同行したのが整形の竹野医師でよかったなあ…と。

被災後の時間の経過とともに必要とされる医療の変化と、再開した周辺の医療施設。町の様子は戻りつつあっても、車が流され、家族が亡くなり、診察に行くことすら困難な避難所の人たちの生活を、常駐する保健師さんに託して帰路についた。

